

工業化と近代化

— W・W・ロストウ「工業化と経済成長」について —

矢口孝次郎

—

筆者はさきに本誌に寄せた拙文「産業革命論の新展開」において、経済史学の一課題としての産業革命の問題が、近年、経済成長論ないしそれに基づく歴史的研究の進展につれて一つの新しい展開を示しつつあること、端的にいえば、産業革命の問題がひろく工業化一般の歴史的進展という視角からとり上げられるに至って、産業革命論は工業化論に転化しつつあることを指摘しておいた。別ないい方をすれば、工業化論の進展に伴って、産業革命論がその中に包摂されるに至ったといえる。ところで、その工業化論は他方において、他の一つの現代的課題としての「近代化」論とも密接に結びついている点を注

目しなければならぬ。というのは、工業化論ないしその基礎をなす経済成長論の生成の一つの重要な契機となったものは、ほかならぬ戦後における低開発国の開発問題であり、またそれとの関連における資本主義国ないし共產主義国の経済成長の比較問題であるが（この問題に関しては、前掲拙稿——「関西大 学経済論集」第一四巻 第一号 七ページ——参照）、これらの問題は同時に他方において、近代化論の生成の一つの重要な契機となっているからである。

この点に関しては、例えば川島武宜氏の最近の次のような指摘をあげることができるであろう。すなわち、「近代化」概念についての「作業仮設上の問題」は、「いわゆる資本主義的变化も、また近時低開発諸国において生起しつつある変化も、今日

の世界史の現実においては密接に相互に関連したまた依存している、他から切りはなして孤立させて考察の対象とするのに適しないこと、それらは各極端に異った——時には相反した——イデオロギー的表現乃至主張やまた実行方法をもっているにかかわらず、同時に共通した大きな方向づけをもっていること、そのゆえに、それらの諸変化は相互に競争者であること、したがってそれらを他と関連させ対照し比較することが今日の人類にとってきわめて興味ある課題であること、がそれである」と(川島武宜氏「『近代化』の意味」——「思想」四七三号、五一六ページ)。続いてこの課題への接近の方法について次のようにいわれる。すなわち、近代化の問題は、世界における種々の異った地域の変化の問題を「単に含むというだけではなくて、これを世界史における同一方向への異なる過程として理論上取りあつかい得る可能性を仮説的に予定しているものであり、したがってそのことは、これらの諸種の過程を共通の判断なく組み frame of reference によって、共通の道具概念によって分析すること、を、提案しているのである」と(同誌 八ページ)。近代化の問題が、説かれるような問題を前提として含んでいること、また従って「共通の判断なく組み」の可能性をも含んでいる

ることについては大体異論なく承認されるであろう。しかしその場合、より重要な問題は、「共通した大きな方向づけ」とか「同一方向」とかいわれるものの内容は何であるかということである。いかえれば、それは近代化のダイメンションをどのように把握するかという問題であって、それについては当然に種々の立場からの立論——例えば、経済的・社会的・政治的・思想的ないし文化的等の立場からみて種々のダイメンションのあることや、あるいは、それらの間の継起列序や対抗ないし相関関係などについての立論——が予想される。しかしまた同時にいいうることは、そのような共通した方向、ないしダイメンションの中最も重要なものが工業化を中心とした問題であるということである。それは上述した近代化論生成の契機からも当然にいいうるところであろう。

それならば、このような意味において近代化論の中核をなす工業化の問題に関して、共通の判断のわく組みをいかにして組み建てるか、という次の問題が生ずるわけであるが、この場合においても、当然に種々の立場からの仮説ないし理論が提起されるであろう。われわれがここにその要点を解説しようと思うロストウの論文は、そのような意図をもつ理論構成の一つ、し

かも代表的な一つである。ところで、すでに経済成長に関するロストウの理論は、わが国においても広く紹介されて、それへの批判をも含めて多くの論議を生みつつあるのであるが、近代化論への深い関心をもちつつ、工業化論を統一的に構成しようとしたこの論文は、現代的課題としての近代化論への一つの視角を提供したものととして、独自の意義を有するものといふことができるであらう。

この論文は、ロストウが一九六〇年にストックホルムで開かれた第一回国際経済史学会において行った研究報告、すなわち“Industrialization and Economic Growth” (*Contributions and Communications of the First International Conference of Economic History*, 1960, pp. 17—34.) の主目的は、「工業化は何故に、またいかなる点で、自存的生長にとって不可欠のものであるかを吟味することである」(p. 17. 以下本書からの引用はページ数のみをあげる)が、同時に、その工業化は社会の近代化の決定的要因と認められている。すなわち、「工業化は更に広い意味においては、直接間接の方法によって、伝統的社会が現実の近代的有機体に推転するについて、長期に亘る・複雑な・相互作用的過程において、決定的な

工業化と近代化(矢口)

・それをクライマックスに達せしめたところの役割を演じたのである」と(p. 23. なお、この一文に climatic とあるのは明らかに climatic の誤植である)。その点に近代化論への視点が据えられているのであるが、そのような視点に立つこの論文を註解しつつ、その要旨を紹介しようとするのが本文の目的である。

二

さてこの論文は三部から成り立っているが、まず第一部においては工業化の行われえなかつた段階の社会を取扱っており(pp. 17—23)・それを「伝統的社会」 traditional societies (pp. 17—23) と称して一七〇〇年以前の時期に当るものと考えている。すなわち、この段階においては、経済成長はあつたとしても、その過程はほとんど常に中途でと絶えて実を結ばないことが常であつたが、この段階の社会の解明についてのロストウの理論(仮説)の要旨は次の諸点に存するといえよう。

(1) 伝統的社会のモデル まず第一は伝統的社会の解明に当って二つの本源的モデルプリミティブを考へていることである(pp. 17—8)。

四九

その一つは「小規模の伝統的社会」と称するモデルであり、他は「伝統的帝国」traditional empire と称するモデルである。

その中、小規模の伝統的社會というのは、そこにおける經濟生活が、比較的限定された農耕地や放牧地、及び狭い（あるいは比較的停滞的な）交易環境などによって、嚴然と制約されている社會であつて、その生産も政治・社會組織もその地域と不可分に結びついていることが特色である。とはいへ、このモデルの社會も、絶對的に靜止的であつたわけではなく、若干の要因——收穫や疫病や戰爭などの間の相互作用——によって、人口や所得において短期の変動のあつたことは認められる。しかし、仮りに人口や所得の増大があつたとしても、時の経つにつれて、結局は衰退期が訪れてくるというのがこの社會の常であつた。これに対して第二のモデルである「伝統的帝国」の場合においては、その政治や交易の單位はより、大きく、またその地域のかなりの拡大が可能であり、特に軍事的行動の及ぶ範圍は更に廣くなつて、その結果が經濟生活に与える影響は第一の場合と比べてより、長期的であり深刻であつた。このような伝統的帝國のダイナミックスについては、アジア（特に中國）の諸帝國や諸王朝の場合、及び地中海や西歐（中世）世界の諸帝國や

諸王朝の場合が考えられている。しかしこれらの諸帝國においては、第一のモデルの伝統的社會に比べてかなりダイナミックな特質はあつたとしても、それも結局は自存的成長にまで發展するものとはならなかつた。何故であるか。その点を解明するために説かれてゐるものが、

(2) 伝統的帝國の抽象的循環 abstract cycle という考え方である (pp. 19~20)。すなわち伝統的帝國にはダイナミックスは認められるが、それは抽象化してみれば一つの循環の裡にあるという。そしてその循環については、まずその出發点をそれ以前の循環の最下降点 trough に求めている。いいかえれば、その直前の時期における戰爭や疫病によって、人口が減少し地積の境界が乱れ交易が混乱したような時期がそれであつて、この時期に際して新しい政治力が力を得て漸次に秩序の回復に向うものと考へる。次いで確立した新しい平和と秩序とのわく内において、經濟が回復し、更にすすんでそこに新しい發展すら見られるようになる。しかしこのような經濟の回復や發展も、結局は伝統的社會にみられる三つの要因——良質の土地に対する人口圧（すなわち人口との對比における生産性の高い土地の不足）、有能・公正であつて且つ計畫性をもつ政治を長期に亘

って持続することが伝統的に困難であること、及び、当時の国家が犠牲の大きい戦争に巻きこまれる傾向が強かったこと——によって制約せざるをえなかった。こうして再び下降 *downturn* が始まるわけであるが、その徴候は軍事的行動・不作・疫病・農民の反抗その他の市民的闘争及び中央政府の崩壊等が種々のかたちで結びついたものとして現われてくる。こうして循環は下降に向い、前述した最下降点に達するわけであるが、他方からみればそれはまた上昇転回点 *upper turning point* でもあって、経済的・社会的・政治的生活は再び狭い限界内に立ち戻ることになる。しかしそこでは生活は、あまり生産的でない・自足的な基礎において行なわれ、一方その結果として人口は常に減少の傾向を辿るようになる。このようにして一応の循環が認められるわけであるが、そこに、伝統的帝国のダイナミックスにおいては、その循環を断ち切って自存的成長へ進みゆくことの不可能であった理由が求められている。

このように伝統的帝国における発展は始めから一定の限界内に停滞する運命（または、いわゆるポットル・ネック）をもっていたのであるが、それは伝統的社会に存する三つの根本的要因がその発展を制約していたからである。その三つの要因と

工業化と近代化（矢口）

は、まず伝統的社会においては技術上の上限 *ceiling* が存在したということ、次いで、良質の土地の供給が限られていたということ、及び、平和と繁栄の状態のいかんによって人口増加率が左右されていたということ、これである (pp. 20~22)。

従ってまた、このような制約の下において動的要因を求めるとすれば、それはただ人為的要因すなわち政府の政策に見出されるに過ぎなかった。ここに、伝統的社会においては政治のやり方 *political process* に特に重要な意義の見出されるゆえんがあるのである。

(3) 工業化の意義 以上のように伝統的社会の何れのモデルにおいても、それが伝統的に且つ内在的に有する制約によって、経済成長は一定の限界内に押し止められていたのであるが、その制約はどのようにして除去されて、成長は前進過程 *on-going process* に推転してゆくのであろうか。それが工業化の過程であるという。とはいえ、工業化は単に伝統的社会の制約を除去するという消極的意味においてのみ考うべきでなく、それは「直接間接の方法によって、伝統的社会が現実の近代的有機体にまで推転するについての、長期に亘る・複雑な・相互作用的過程において、決定的な・それをクライマックスに

達せしめたところの役割を演じた」ものとして (p. 23) 、より
 広く把えられていることを注目しなければならぬ。

註 ロストウが工業化段階以前の社会、ないしテイク・オフ
 以前の社会のすべてを伝統的社会という一つの範疇に押し込
 んでしまつてゐることは、すでに前著 *The Stages of Eco-
 nomic Growth*, 1960 (pp. 5ff. 木村・久保・村上共訳「経済
 成長の諸段階」九ページ以下参照。なお以下本書は *The
 Stages* として、共訳は「邦訳」として引用する) にもみら
 れるところであつて、このような取扱いに対しては歴史家の
 間からの強い批判が存する。例えば C・グッドリッチは次の
 ように述べている。「経済成長という考え方にとっては、過
 去はすべて、従来は産業革命と称せられ、現今は自存的経済
 成長へのテイク・オフと呼ばれてゐるところの、ただ一つの
 天啓的事件への、序幕ないしせいぜい『先行条件』であるに
 過ぎない。それ以前のすべてのものは無差別的に一つの捨て
 場に投げこまれ、いわば一種の経済上の紀元前 economic
 B.C. とされてゐる。しかしこのような考え方はわれわれの
 仲間の知的関心を満足させることにはならぬであらう」
 2) (Carter Goodrich, "Economic History: One Field

or Two?" *Jour. of Econ. Hist.* XX, 4, p. 536. なお前掲
 拙稿参照)。しかし、ロストウはこのような取扱いが理論操
 作上の必要からきたものであることを予め断つてゐる。すな
 わち「これらのかぎりなく多様で変化に富む社会を、それら
 が何れも経済的技術の生産性に上限をもつていたという理由
 だけで、ただ一つの範疇に押し込んでしまふことは、ほとん
 ど何ごともしも等しいといえよう。しかし要する
 に、われわれは本書の主題に到達するための道を開こうとし
 ているに過ぎないのである」2) (*The Stages*, pp. 5—6.
 邦訳、九ページ)。この点は本論文においても、ほぼ同じよ
 うな立場から予め述べられてゐる。すなわち「もちろん、人
 類の歴史は極めて数多くの経験をわれわれに示している。し
 かし、これを単純化するために——ということとは、伝統的社
 会に見られるところの根本的過程の筋を辿るために——二つ
 の本源的モデルを考えることは有用なことであるといえよ
 う」と (pp. 17—8)。このように史実を理論的に組立てるた
 めに「意識して経済史に対して相当乱暴な処理を行っている」
 ことは他の場合にもしばしば認められる (*The Stages*, p. 40.
 邦訳、五五ページ)。

以上のように工業化過程は、伝統的社會が近代化するについての最も基本的な過程であつて、従つて當面の最も重要な問題は、その過程がいかにして進行するかといういわば工業化のメカニズムの問題であるが、ロストウはその問題の解明は第三部にゆづり、第二部においてはその理論的前提として「工業化」の概念についての若干の必要な説明を与えている。

ロストウはまず「工業化とは、財貨並びにサービスの生産のために、科学及び技術を組織的に・規則的に・漸進的に用うることである」と称し、そのような意味における工業化について、その技術上及び経済上の必要条件と特質とを、次の五点をあげて説明している。

(1) まず工業化の前提ないし必要条件の第一にあげられるものは心理的(精神的) *psychological* のものであつて、それは「自然界は、人間が把握しうる比較的少数の不変の法則によつて、理解し且つ支配することが可能であるという考え方が承認される」こと、別な表現によれば、「ニュートンのなものと見方」*Newtonian view of outlook* が社會に広く行なわれるよ

工業化と近代化(矢口)

うにならなければならない、ということである(pp. 23~24.) またこのような意味において、ニュートンのなものと見方の出現が經濟史上の分水嶺であるなどといわれるのである。一方この点は、更に別の見地からも表現しうるのであつて、例えばこのような社會の雰囲気の中からアシュトンのいわゆる「考察衝動」*impulse to contrive* が生れるといわれ、また、これを主体的側面からいへば發明家の出現と考えることもできるといふ。

(2) 必要条件の第二は、いわゆる産業資本ないし産業資本家の存在であるが、それは広い意味において考えられている。すなわちまず「伝統的の農業や商業や銀行業におけるリスクとは全然異なつたリスクを含むところの事業に、進んで資本を投下しようとする(私的ないし公的)の新しい種類の企業家 *entrepreneur* が存在するに至る」(p. 24. 傍点筆者)ということである。この意味の企業家は、別な表現によれば、第一の場合の發明家に対して、革新(企業)家 *innovator* と称することもできる。一方、このことは客観化してみれば、工業化の始動のためには、たとえ小額のものであるにせよ、まず産業への最初の投資がなければならないということの意味している。とはいへ、

もちろん、工業化が本来の軌道にのって更に前進するためには、相当量の社会的平均資本の蓄積が必要であり、それについては更に高い関門を突破しなければならないが、この点は後述の第四点において言及されている。

(3) ところで、次の必要条件を説く前に、ロストウはここで、工業化に関する一つの特色をあげている。それは「工業は、一旦近代的の科学や技術を基礎として発足すると、背後にも、側面にも、前面にも、伝播性をもつもの *infectious* となる」(p. 24)ということであるが、ここに伝播性というのは一種の連鎖反応作用と解してよいであろう。すなわち、まず背後への伝播性という点についていえば、近代的工業活動はその背後に原料や機械の投入に対する要求をもっているが、それらの要求は、次には、新しい工夫考案のための態勢や方法の一層の拡大を求めるに至るといのである。次に側面への伝播性という点については、近代的工業活動はその周囲に、それと結びつくところの種々の人間やサービスや制度を伴っているが、それらのものは、前進過程としての工業化の基礎を強化するものとして存在している。従ってそれらのものの組織やあり方は常に工業活動の要求によって、影響され、決定されているという

のである。最後に、前面への伝播性という点については、近代的工業活動はその進展に伴って、経営的にも技術的にも種々のかたちの新しい問題を生み出してゆくが、そのことはとりもなおさず、次々と新しい工業活動のための舞台を造り出してゆくことである、と。このような三面の伝播性が近代的工業活動の顕著な特色であるというのであるが、その一部は、後述の工業化のメカニズムに見られる帰還作用と関連して考えることができる。

(4) そこでふたたび工業化のための広い意味の必要条件を考えて、非工業的部門の拡大ということをあげている。すなわち「新しい製造部門ないし加工部門が工業化の不動の核心であることは誤りないが、発展の初期の段階においては、三つの非工業的部門における拡大がなければ、社会は不断に近代化することはできない」(pp. 24-25)と。その第一は農業部門であって少くとも工業化に基ずく貿易の拡大によって食料輸入が可能となるまでは、増大する都市人口を維持するに足るだけの農産物の増産が行われなければならない。いかえれば農業における生産性革命が前提として要求されるのである。第二は貿易部門であって、工業化の前進のためには時とともに増大する工業

施設や原料の輸入を必要とするが、それは国内産業に基礎をおく輸入の増大によって賄われねばならない。すなわち輸出貿易の拡大ということである。第三に、特に重要な前提は龐大な社会的平均資本の存在ということである。工業化のためには特に教育・運輸・エネルギー等の事業のための龐大な社会的平均資本を必要とするが、そのためには、自己の有する資源の中から原料・労働・技術等を動員しえなければならぬ、と。ところで以上のような非工業部門の拡大について特に注目すべきことは、それらの拡大は政府の政策によって支配されることが大きく、その保護や指導によって始めて可能となることが少なくないということである。このような意味において、テイク・オフの先行期においては、政治のやり方の占める役割が特に重要な意味をもつものとなるのである。

(5) 最後に工業化に関して、それと出生率低下の現象との関連が一つの特色としてあげられている。それは、工業化の多面的進行につれて実質所得の増大がみられると、人々の福祉水準に関する旧来の宿命論的^{フエイタリスティック・エクスペクティション}な将来観が変えられて新しい家族計算を生み出すようになり、こうして出生率低下の現象を生ずるに至るといっているのである。この現象は育児費の高い都市

生活において特に著しい。なお、ここに旧来の宿命論的将来観というのは、前者における説明によれば、「ある人の孫に開かれていた可能性の範囲は、その人の祖父母に開かれていたものとほとんど異なるところはないという考え方」(The Stages, p. 9. 邦訳、八ページ)や、また「子供をもつということだけが比較的固定した将来しかない苦しい生活において、生命の永続を祝福し確認するにわたるわずかに残された機会である」(The Stages, p. 10. 邦訳、二六―二七ページ)という考え方を意味する。それとともにその前著においては、このような出生率低下の他の要因として、「非熟練的農場労働に対する要求の低減」があげられていることを一言しておきたい。何れにせよ、この現象は工業化に関する社会的面の一つの特質としてあげられているのであるが、何故にこの点だけを取り出したかの理由は特に説かれていない。

さて以上が工業化のための必要条件及び特質であるが、「これらのものは、全体としてみる時は、工業化の過程についての相互に結びついた五つの要素であって、それらの要素の有無が、伝統的経済と近代的経済との間の重要な技術的差異を決定するのである。また第一部で示したような二つのモデルの伝統

的社會にそれらの要素が導入された時始めて、そこに存する上
限が排除されて自存的成長に向う途が拓かれることになるので
ある」と(p.25)。それならば、それはどのようなかたちをと
って行われるか。それが本論文の中心としての第三部の課題で
ある。

四

以上にあげた五つの条件ないし特質が近代的經濟の成立ない
し工業化のための基本的要素であることは認められるにして
も、ただそれらを列挙するだけでは工業化の過程を説明したこ
とにはならない。何故ならば、それらの要素が現実に存在しう
るためには、社會のあらゆるダイメンションに関連するところ
の深刻な一連の變革を経なければならぬからである。そこ
で、そのような變革がいかにして行われたか、また、それをど
のようにすれば理論的に整序して説明しうるかという問題が生
ずるわけであるが、それがすなわち工業化のメカニズムの解明
であって、第三部の主題となっているところである。のみなら
ず、この部分の論述はロストウの従来の所説を更に發展せしめ
たものであることが特に註記されている。すなわち、「本節で

以下に説くところは、*The Stages of Economic Growth*, 1960
においてなされた、テイク・オフの先行条件についての・何れ
かといえは簡潔な考察(*The Stages*, pp. 6-7, 26-51, 邦訳、九
一一、三六一四二ページ)を更に發展せしめたもの」(p.26,
p.2)であり、また一方、「この部分の理論的基礎は、社會を
構成している種々の部門の相互作用についての従来の自分の考
え方 (*British Economy of the Nineteenth Century*, 1948,
Chap. vi, *The Process of Economic Growth*, 1952, esp.
Chap. iii)を更に發展せしめたものである」(p.33, p.1)と
稱している。以下、われわれはロストウの説くところを、若干
の項目に分けて解説したいと思う。^(註)

註 なおここに一言しておかねばならないことは、ロストウ
はこの問題の解明に当つても、理論的立場から一つの前提を
おいているということである。すなわち彼の解明は、一方に
伝統的社會をおき、他方に近代的工業化社會をおいて、前者が
いかにして後者に推轉したかということを主題としている。
従つていわば自生的に行なわれたといわれるイギリスの産業
革命の問題や、伝統的社會からの脱出という経過をとらない
社會の工業化過程は、考察の外におかれているのである。こ

の点はすでに前著において、「テイク・オフの先行条件(期)」ないし「過渡的時期」を考察する場合にも見出すことができる。すなわちその場合は、二つの事例ないし類型^{ケース}を設けて、推転のかたちを区別しているが、第一は一般的事例といわれるものであって、伝統的社会からの脱出というかたちをとる場合である。特に「より進んだ国外勢力の侵入ないし侵入の脅威に対するナショナリズム的な反撥のうちに自らを近代化していく社会の場合」である(*The Stages*. p. 35. 邦訳、四七ページ)。これに対し第二は特殊的事例といわれものである。すなわち「自由なるものとして生れた」国々 Nations 'born free' である(*The Stages*. p.17. 邦訳、二四ページ)。そこにおいては「伝統的社会の構造、政治および価値観に束縛されること」がなく、「したがって、それらの国々の近代的成長への推移の過程は、主として経済的なものであり、技術的なものであった」(*The Stages*. p. 17. 邦訳、二六ページ)。とはいえ、この二つの事例の境界線はそれほど明確ではなく、且つその間の区別は控え目に用いなくてはならないという。また同時にそれぞれの国ないし社会を、この二つの事例の何れに属せしむるかにについては、困難な場合のあるこ

工業化と近代化(矢口)

とも予想される。イギリスの場合がそれであるが、産業革命を中心にして考える時は、それは特殊的事例に当るものといふことができる。

(1) さて工業化のメカニズムに関して第一に問題となる点はいかにして伝統的社会に新しい動的趨勢 new dynamic trend が生み出されたかという問題、いわば近代化の始動の問題であって、それについては二つの系列の要因が考えられている。第一は先進的的社会との接触ないしその与える衝撃^{インパクト}によってそれが生み出される場合であり、第二は伝統的社会的内部における消極的事実 negative facts によってそれが生み出される場合である。まず第一の場合についてみるに、それははっきりと区別される三つのかたちをとっている。すなわち、実力による侵入の場合(多くの場合植民地支配を含む)、経済的典例^{エグゼンプル}が示される場合、及び観念や技術の交流というかたちをとる場合がこれである。このような衝撃は前著においては、先進的社会的「デモンストレーション効果」として説かれているところであって、それへの反応の仕方は社会によって必ずしも一様ではなかった。まずその反応の最も顕著な植民地社会についていえば、その反応は「独立の目標」に集中したのであって、第二の

場合に比べて一層強力な「反撥型ナショナルリズム」ないし「外人排撃型ナショナルリズム」なつて現われた (*The Stages*, pp. 26-28. 邦訳、三六一—三九ページ)。これに対して植民地支配の行なわれなかつた社会においては、「その推移の過程は、軍事的の劣等感や国民的の危機感により、また自作地を求めるところの農民の圧力により、また新しく得た才能技術を行使しようとする教育をうけたエリートの圧力により、更にまた、より高い福祉水準への到達の可能を信ずる一般の信念によつて、種々の段階・種々の方向において実現したのであつた」(p. 26)。このように、何れの場合においても、外部からの衝撃、それに対する反応ないし反撥として近代化への始動^①動的趨勢が生み出されたのであるが、これに対して「消極的事実」によつてそれが生み出された場合が考えられる。ロストウがここに消極的事実というのは、例えば伝統的社會の解体期に、すでに空位となり或いは弱体化した従来の権力に代つて、政治力野心を有する人々や団体が新たにその座につき権力を握ろうとする闘争にみられるように、現象としては近代化とは無関係であり、或いは隔絶している事実を指しているであつて、その意味において negative と称しているのである。しかしこれらの事実も、

相当長期に亘つてみる時は——例えば最近の一世紀間のラテン・アメリカ諸国にみられるように——近代化を求めるところの種々の集團の欲求を反映し、且つそれを満しているものということが出来る。このような意味において、「伝統的の指導者ないし植民地権力(或いは両者の結合)を排して権力を継承しようとするむき出して闘争も、本質的には(近代化への)推移過程における積極的な要素となるのである」と(p. 27)。

(2) ところで、このようにして近代化への新しい動的趨勢が生み出され始動が行われたとしても、それだけでは近代的体制が実現したものとはいえない。そのためには——ということとは、社会に存する近代的要素が支配的となり現実に影響力をもつものとなるためには——それに先んじて、社会のあらゆるレベル(或いはダイメンション)において深刻且つ積極的な一連の変化ないし変革が行われなければならない。それがいかなるかたちをとつて行われたか、ということが近代化ないし工業化のメカニズムに関する第二の問題である。ところで、そのような変化ないし変革は当然に社會の種々のレベルに認められが、特に重視すべきものとし次のような若干の面が指摘されている。まず精神的な面からみれば、人々は近代的活動や制度に適

合するように古い文化を變革しなければならない。例えば、伝統的社会にみられるような・個人間の直接的關係 face-to-face relations や温情的で強固な家族的結合が、漸次に、人々が社会において担当する特殊な機能によって評価されるような非個人的な評価体制 impersonal systems of evaluation に代つてこなくてはならない。次に考えられることは、社会的・政治的の力のバランスが農村から都市へ移らねばならないということと、これを他面からみれば、農業生活と結びついた仕事や徳目タスクス・グア・チユース（の重視）が、商業・工業・近代的政治等と結びついたそれに移り変らねばならないということである。また政治面においては、人々は、政治権力の組織や移動についての新しい形式を受けられるようにならなければならないということである。いいかえれば、政治や政治家を彼らの伝承した身分や個人についての観点から判断することをやめて、政治そのものの観点から判断するようになること、また政治権力の移動については、予めその承認を前提として行うという形式（民主的政治体制）が生み出されねばならないということである。その他、これらに類する種々の變革が考えられるわけであるが、それらは何れもその社会にとっては深刻な變革であるといわねばならない。

工業化と近代化（矢口）

従つて、それらの變革は何れも易々としてなしとげられる筈はなく、その点に関連して、特に二つの点が注目すべき点としてあげられる。その一つは、それらの變革が行われるためには、何れも相当の時間を必要とするということであり、第二は、近代化を推進する諸力ないし誘因は、常にそれを阻止しようとする抵抗や反抗に直面するということであつて、その間の抗争はこの過渡的過程の本質から当然に生ずる現象であると考えられている。

(3) そこでこれらの現象、特に阻止のない抵抗的要素との抗争という点からみる場合、この過渡的過程はどのように理解されるか。この点に関してロストウは「この相互作用過程の基本的特質」として次の諸点をあげている。

まず一方において、近代化の自動的進行 automatic slide の行われる場合が想定される。それは伝統的社會の解体期に出現してきた三つの力——すなわち、近代的社会との接触や交流の拡大、交易及び都市の興隆、及び、古い様式に囚われることなく、近代的行動が過去との断絶というよりもむしろ日常生活の常態となつているような新しいジェネレーションの出現——が、相互に強化し合いながら（ということとは抵抗に合うことと少

なく)全体としてその社会を近代化してゆく場合である。このような意味において、そこには、伝統的社会を解体せしめた諸力から自動的に近代化の行われる場合が想定されるというのであって、これを近代化過程の基底ないし下限 floor と称している。そしてこれに対立するものが、その過程の上限 ceiling である。すなわち、上述のような近代化推進のための諸要因も、現実にはその速度について常に種々の制約をうけ、一定の限界に止められている。例えば近代的人間を育成する速度、貿易の拡大や都市の發展の行われる速度等は、何れもそれぞれの社会の有する特定の条件によって左右されており、また、新しいジエネレーションの継起やその将来は人間生活のリズムそのものによって制約されている。また一方、それぞれの社会の伝統的の文化や社会構造が、その社会の近代化に適應するものとして働らくか、或いは抵抗するものとして働らくかについて、そこには極めて種々の偏差があるといわねばならない。このような諸点からみて、近代化推進のための諸要因も一定の限界においてのみ働らくのであって、そこに上限があるというのである。

それぞれの社会の近代化はこのような意味の下限と上限との限界内で行われるのであって、その推移の中に近代化過程の諸

段階が認められ、またそれぞれの段階はそれに應ずる中心問題をもつものとして存在しているのである。このような観点からみる時、近代化過程はおよそ次のような三段階に分けて考えることができる。

第一の段階における中心問題は、先進社会の侵入ないしそれの与える衝撃がいかなる性質のものであるか、またそれに対する伝統的社会の対応がいかなる特質をもつものとして現われるか、ということによって決定される。従ってこのような初期の段階における過渡的過程の問題は、本質的に國際的關係の問題として現われ、その現象は前に述べたように外国勢力の排撃やそのための国内諸勢力の結合(いわゆる「過渡期の勢力連合」—The Stages, p. 28, 邦訳、三九ページ参照)として現われるが、その目的とするところは国家の独立であり国力の増強であった。しかるにその独立が達成され、近代化が目標として確立されるに至ると、中心問題は国内的問題に移り、そこに第二段階への進展が認められる。この段階における中心問題は、独立後の社会において、伝統的要素と近代化的要素との何れが優位を占むべきかという問題をめぐって展開する。次いで、その對抗において近代化的要素が勝利を占めるに及んで第三段階へ

の進展がみられる。この段階における中心問題は、もはや国家の独立や権力の所在いかに関する問題ではなくして、近代化の目的のためにいかなる政策をとるべきかという方法の問題、ないし後述のいわゆる戦術の問題に移ってくるのである、と。なお、このような近代化の進行に関する三つの段階の考え方は特に後述するところの「低開発地域の分類」の一つの基準となつてゐることをここに一言しておきたい。

(4) 以上が工業化を中心として考えられた社会の近代化のメカニズムについてのロストウの基本的構想であるが、彼は最後に、特にテイク・オフ段階に関して認められる工業化の一つの顕著な特質を指摘している。それが帰還効果（ないし作用）feedback effect と呼ばれるものである（pp. 29-30）。一般に帰還効果とは、電気学・工学・サイバネティクス等において、「一つの動作による結果をその原因に戻し、それによって結果を増大（ないし減少）させる動作過程である」といわれているが、今の場合には、「経済的進歩は他の次元における近代化への動きの結果であるとともに、一方自らそれ以上の変化を惹き起す力でもある」という意味において、いわば比喩的に用いられているのである。そしてこの観点からみたテイク・オフの

与える帰還効果を次の五つの点に見出している。

a もともとテイク・オフに前進するためには、まず当初に社会の支配的エリートが近代化のために専心に従事すること commitment を必要とするが、それが成功して近代化が一定の軌道に乗り社会の中心的課題となってくると、当面の問題特に政治的論議は、いかなる方法によってそれを有効に実現するかという方法論上の問題に狭められてくる。こうして政治のやり方に対して、「新しい・より、狭められた・合理的によくまとめられた課題」が与えられることになり、その結果近代化に「専心に従事すること」がますます強化されるようになるというのである。こうして近代化は加速度的に進行する。

b 第二にテイク・オフはその本来の性質上、社会内の交流の密度を強化しその範囲の拡大をもたすが、その結果は一国民 nationhood という意識を強化することになる。また一方、テイク・オフの段階では文教の著しい拡大がみられるが、このこともまた近代的政治のやり方のための一つの基本的前提をつくり出すことに外ならない。このような意味においても、テイク・オフの効果は帰還して近代化を強化するものとして働らくというのである。

c 前述の点は農業部門においては一層顯著である。というのは、農業部門においては、国民的交流や文教の普及は、ティク・オフに伴う他の二つの要因、すなわち、一つは農村の運命を都市地域に結びつけるところの農業の商業化、他は日常の経営において農民を国家に結びつけるところの国家政策(例えば土地改良・租税・技術援助その他)の遂行によって、一層強化されるに至るからである。

d 次に都市部門に関連した点をみれば、ティク・オフは都市化 urbanization の速度を早める傾向をもっている。ということは、人口のままますます多くの部分を、都市生活の特色である本質的に近代的な一連の關係に組み入れるようになってくる。これらの人々は、始めは従来知らなかったような多くの問題に直面するが、或る時期を過ぎると、彼らは自らに与えられた新しい社会の機能的役割をひきうけるようになり、また相互に結合するようになってくる。こうして、組織を結成し始め、自分らの利害關係を政治のやり方に反映することを求めるようになってくるのであって、ここにもティク・オフの帰還効果の一面が認められるという。

e 最後に政治面における帰還効果みるに、ティク・オフの

最も直接的の結果は、政治的エリートの中において或る要素が特に強化されてくることに關して認められる。いいかえれば、商工業者・官吏及び近代的活動に従事する技術的・専門的の若干のグループの人々の確信と支配力とが強化されてくるということである。全体としてのこれらのグループは、社会における近代的部門の拡大について特権的權益を有し、また政治のやり方に関しては、安定した・彼らに大きな発言権を認めるようなかたちの組織に等しく特権的權益をもつようになってくる。この点は、前著においては、「ティク・オフが行われる」ということは、通常、伝統的社会にすぎりつこうとする人々ないし近代化以外の目標を求めようとする人々に対して、經濟の近代化を計る人々が決定的な社会的・政治的・文化的勝利を収めることである」(The Stages, p. 58, 邦訳、七九ページ)として更にひろく解釈されている。何れにせよ、こうしたエリートの成立が近代化を一層強化推進するものとして働らくところに帰還効果を認めているのである。

五

以上が工業化を中心とした近代化のメカニズムについてのロ

ストウの解明の要点であるが、そのような理論構想——いわば共通の判断のわく組み、ないし道具立て——が与えられたとしても、それによつてもろもろの社会の工業化や近代化をどのようにして説明するか。ロストウはこの問題に答える一つの方法として、歴史の示す広範な偏差を承認した上で、「もろもろの社会を、伝統的狀態と首尾よくテイク・オフを完了した状態との間の何れかの段階に存するものと考え、その間に或る有効な分類を設ける」ことを主張し、且つそれが可能であるといふ

(p. 30)。ところで、もろもろの社会をこのように、「伝統的狀態と首尾よくテイク・オフを完了した状態との間の何れかの段階に存するもの」として考えるならば、それらの社会は、他の観点からは、過去(及び現在)におけるもろもろの段階の低開発地域と考えることができる。ロストウが近代化過程に関連して見たもろもろの社会の間の分類を、同時に「低開発地域の間における分類」と称しているのは、このような見地からである。それならば、その分類はどのような立場から行うべきであるか。ロストウは分類を行うための原則として、「それぞれの社会が、近代化の次の段階に進進するに先んじて直面するところの戦術上の問題[Strategic problems] (p. 31) が何であるかとい

う点をあげている。ここに戦術上の問題というのは、いうまでもなく近代化のために、いかなる部門に関して、いかなる方策を、いかなる順序で行うかという問題であつて、それは当然に広範な領域に亘る問題を含んでいる。そしてそれらの問題が何であるかによつて、低開発地域はおよそ次のような四つの範疇 categories に分類することができるというのである (pp. 31-32)。

A 範疇 「この範疇に属する社会は、なお依然として伝統的段階に近い社会である。そこにおいては、政治的にも社会的にも精神的にも、支配的な力は伝統的社会から引継がれたものとして存在する。また文教の普及や国民生活に関する一般社会の関与は依然として低い段階にあり、経済は或る限られた程度においてのみ近代化されているに過ぎない。かくて近代化を前進させるために克服しなければならない基本的問題は通例次の通りである。すなわち、(1) 近代的の経済的政治的活動を担当しうる人間を育成すること。(2) 経済政治の両面において近代的の運営制度を發展させること。(3) 農業生産力の増大を可能ならしめるような農業構造を創出すること。(4) 近代的輸送網・動力源・その他の最低限の社会的平均資本を建設すること。

(5) 自然資源に対する近代的技術の加速度的応用。(6) 政治権力を、伝統社会に根ざした利害関係や世界観をもつ人々の手から、近代化に積極的に専心従事する人々の手に移すこと。」以上がそれである。

なお、ここに列挙した諸問題とほぼ等しい問題に直面していたものとして、およそ一八一五年頃の西欧(大陸)、一八六一年のロシア、一八六八年(明治元年)の日本等があげられまた現代においていえば、大体において、砂漠地帯南方のアフリカの大部分、中東の比較の後進的な地域、ラテン・アメリカの中の進歩の遅れた若干の地域等があげられている。

B 範疇 「この範疇に属する国家においては、近代化に必要な少なくとも最低限の人間や社会的平均資本を生み出すについて、或る程度の前進が行われている。また、中央政府の諸制度が成立し、小数の独裁者が政権を握って、原則として近代化に着手している。しかし有効な近代化はまだ表現されていない。

A 範疇 国の場合に示したような・最初に必要とされる六つの課題は、このB 範疇国の課題としても依然として妥当する。しかしこの場合は、その方向に向ってすでにかなり前進しているわけであるから、テイク・オフへの努力は、更に比較的短期間の

技術的準備を重ねるだけで十分であるといえる。この場合の戦術的問題は、近代化についての国内的の事業のために、国民の有するエネルギーや才能や資源を集中的に用うるということである。」

大体においてこの状態に当るものとしては、一八四八年の革命前の十年間におけるフランスとドイツ、一八七〇年代(明治三年—十二年)のロシアと日本があり、現代においては、イラン、イラク、パキスタン及びインドネシアがこの範疇に入る。

C 範疇 「この範疇は、テイク・オフのまっただ中にある社会を含んでいるといえる。」

この範疇に属する歴史的事例はすでに周ねく知られているところであるが、現代についていえば、インドと中共がその主要な事例であるといえることができる。そのほか、フィリピン、ブラジル、ベネズエラその他の国々がこれに属する。

D 範疇 「この範疇に属する社会においては、近代化の過程は、経済的社会的の次元において、すでに^{モメンタム}は^{モメンタム}つきつてその度を増してきている。そこでは、テイク・オフ後の時期にあたって、成長をテイク・オフの間におけるよりも広い範囲に亘つ

て持続するために、種々の重要な組織上の諸問題に直面している。またテイク・オフによって促進された転換^{シフト}を反映するため、政治制度の変更や社会的力の分布の変更のための努力をどうしてもしなければならない。」

このような組織上の諸問題が種々のかたちで入り混って存在していたのは、一八一五年から一八三二年までの間のイギリス（ブリテン）、一八七〇年代のフランスとドイツ、及び第一次大戦前十年間のロシアであり、現代についていえば、アルゼンチン及びトルコの直面する諸問題がその代表的な例である。

さて上述のように近代化ないし工業化の何れの段階においても、社会は常に次々と生ずるところの新しい問題に直面しそれを克服して前進しなければならぬが、それは何故であろうか。そこに工業化の過程を理解するについての複雑性が存する。それについてまず考えられることは、工業化は伝統的の社会においては、外部からの衝撃によって求められるに至ったものであり、この意味においていわば一つの誘導された要求 derived demand ^{デリヴァドデマンド} であることである。しかるに一方、工業化は

（一旦開始されると）、精神的・技術的・制度的・社会的・政治的・経済的の何れの面においても、それ自らの至上命令 imperatives をもつものとなってくる。こういうわけで、われわれが過去及び現在の歴史においてみるところは、もろもろの社会において工業化がいかにして自らの至上命令を貫いてきたかということであって、その場合、常に、旧い方法と新しい要求との間の相剋と順応とが種々の程度において繰り返えされていくのを知るのである。しかし時とともにその順応が進行して、多少の困乱を伴いながらもテイク・オフの先行条件が充足されるようになる。こうして、近代化の成果を求める人々の要求とそれをもたらすについての態度や活動との間のギャップが漸次狭められてくると考えられるのである。次いでテイク・オフに前進するのであるが、テイク・オフは単に経済に対しては、^{テイク・オフ}のみでなく、社会における社会的・政治的・精神的のすべての面におけるバランスを換え、こうして工業化の前進をますます容易ならしめるようになる。しかしもちろん、社会の直面する問題は無限であって、工業化はただい、^{テイク・オフ}に進ずるものとは限らないであろう。とはいえ、この段階に至れば、「社会のすべての部門に、一定の価値と利害関係とがはっ

きりと公約されて、それは自らを主張するようになり、結局は、近代的交流と政治的連繋の行われている世界においては、ますます広範にプールされつつある近代科学と技術との与えるものを、自らの社会の諸資源に適用せしむるに至るのである」と (p. 33)。ロストウは工業化の前進をこのように展望しつつこの論文を終っている。